

---

Your mine

ティア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Your mine

### 【コード】

N5260A

### 【作者名】

ティア

### 【あらすじ】

主人公、耀ようと小夜、遼、由宇は見事な四角関係。耀たちはこれからどうなっていくのか・・・。

## 第一話・俺たちの日常

イライラする。

半端なくイライラする。

そろそろイライラのゲージがマックスに到達する。

俺の目の前には、俺の片想いの相手、希代きしろ 小夜さよと小夜の親友の明あ津く 由宇ゆうとクラスメイトの椎名しいな 遼りょうがいる。

俺をイライラさせているのは、この男、椎名 遼だ。

遼は今、小夜に抱きついていてる。

遼はかなりイケメンで、女には不自由しないと聞いた。

中身は悪いやつではないのだが、激しい女好きだ。

最近はよりによって小夜を気に入っている。

どうせなら、由宇を気に入ればいいのに・・・。

由宇は、遼の容姿にも十分釣り合うほどの可愛い女の子だ。

テンションの高い遼や小夜と一緒にいるのに、由宇はかなり物静かな子だ。

大人しくて、気品のある立ち振る舞いをする。

小夜はそれなりに可愛いが由宇ほどではない。

でも、明るくて皆に好かれている。

彼女の眩しい笑顔を俺は好きになった。

結構、容姿の高いこいつらと付き合っている俺は、かなり平凡。

こいつら三人は容姿がいいだけじゃなく、頭も良い。

遼に至ってはスポーツ万能でモテない要素がない。

俺、直井なおい 耀ようは、顔も普通なら頭脳も人並み、スポーツもそれなりにできるが、そんなに得意というわけではない。

それなのに、由宇は俺に好意を持ってくれているらしい。

それは凄く嬉しい。

でも、俺が好きなのは小夜で、由宇の好意に応えるわけにはいかなかった。

「つか、いい加減に離れるよ。遼」

「なに？ヤキモチ？じゃ、お前もやればいいだろーが」

「ばっ、俺はそんなこと言ってるじゃなくて・・・」

「じゃあ、どういうことだよ？」

「それは・・・」

うっと言葉に詰まってしまふ。

遼の口はかなり達者だ。

将来は、詐欺師という職業にも就けるのではないだろうか。  
いいよな、お前は。いくらでも就職先があつて。

「どうした？あ？泣くか？」

「泣くかつ！馬鹿！」

「けっ、泣けば面白かったのに」

「もお、いい加減に喧嘩やめなよ。耀、遼」

「まあ、小夜がそういうんなら耀をからかつのはやめようかね」  
そう言つて、遼は小夜から離れた。

「ったく、最初からそうしてろよな」

「よく言つぜ。小夜に助け舟だしてもらつたクセによ」

「ふんっ！」

「も〜！」

呆れる小夜と静かに微笑む由宇。

今はこの四人でふざけあつているのが、日常である。

でも、小夜を俺と遼が好きで、由宇が俺を好きで、でも俺は小夜が  
好きだから、その気持ちに伝えることはできなくて・・・。

もちろん、こんな関係はいつまでも続くはずがなくて・・・。

## 第一話・俺たちの日常（後書き）

初めての連載です。

いろいろとおかしい部分もあると思いますが、

そういうのを指摘していただけたら嬉しいです。

感想・評価をお待ちしています。

## 第二話・衝撃の事実

俺は今、究極的にヤバイ場面にいる。

俺はその日、偶然、学校の裏庭の焼却炉にごみを捨てるために焼却炉に向かって歩いてた。

その角を曲がれば、もう焼却炉が見える、というところで誰かの話し声が出て、俺は反射的に足を止めた。

ゴミ箱を音を立てないように地面に置いて、声の主を探した。

会話している人物たちを見て、俺は愕然とした。

話しているのは、他の誰でもない小夜と遼だった。

この雰囲気から言うと、多分、遼が小夜に告白しているのだろう。

タラシの遼も意外とありきたりなところで告白をするんだな・・・いや、今はそんなこと言ってる場合じゃない。

遼ほどの美形ならもしかしたら小夜が告白をOKするかもしれない。俺は中断させたいのに、飛び出していけず、様子を見守るしかなかった。

本当に微かだが、会話が聞き取れた。

「気付いてる、よな？俺の気持ち・・・」

「うん・・・」

「分かってて、返事くれないってことはやっぱり返事はNO?」

「・・・ごめん」

「謝んなよ。予想はしてたからさ。やっぱり、お前、あいつ・・・耀が好きなんだろ?」

「はっ?!」

んなわけねえだろうが、バカ遼。

だが、小夜の返事は思いもよらないものだった。

「うん・・・そうだよ・・・」

「はっ?!ウソだろ?!マジで?!」

「やっぱな・・・でもどこがいいわけ?あんなやつ。確かに良いヤ

ッだけでも、外見だけなら俺の方がかなり良くねえ？」

・・・うるせえ。

「私は人を容姿では選ばない。耀は、・・・優しいし、ちょっと頼りないけど面白いし・・・一緒にいてすごく楽しいんだ」

「ふうん・・・そつか。じゃあ、まあいいや。そんなじゃな」

「あつ・・・ごめん、耀・・・。これからも友達で・・・いてくれる？」

「あつたりまえだろー」

そう言つと、遼はヒラヒラと手を振りながら、こっちへ歩いてきてしまった。

小夜はまだ一步も動いていない。

まずい。

でも足が動かない。

すると、遼の目が俺の姿を捉えた。

遼はふつと笑つと、俺の隣まで来て、俺の肩に手を置いて、

「良かったな・・・」

と言つた。

その笑顔が、どこか哀しくて。

今まで遊び呆けていた遼が今回、小夜には本気だったことが分かつた。

遼はそのまま、どこかへ歩き去ってしまった。

俺は気まずくなつて、その場から立ち去ろうと顔を上げた。

そのとき、小夜と俺の視線が絡み合つた。

## 第二話・衝撃の事実（後書き）

初の連載の第二話です。

連載と言ったわりにはもう次話あたりで最終話を迎えそうな感じ  
です。

感想・評価をお待ちしています。

## 最終話

「耀……」

小夜の口がそう言葉を吐いた。

「ごめん……盗み見するつもりはなかったんだけど……」

「も、もう！やだな！いるなら、いるって言ってよ！」

小夜はやはり恥ずかしいのか、顔が真っ赤になっている。

小夜が近寄ってきて、俺の肩をバンバンと叩く。

「それで……聞いてたんでしょ？」

「あ、ああ……」

「返事、は……？」

言葉に詰まる。

好き。確かに好きなのは変わらない。

でも……何故だろう。

さっきの悲しそうな遼の顔が頭に浮かぶ。

「俺、は……」

「どう……なの？」

すき、というこの二文字がうまく言えない。

伝えたいのに、伝えられない。

「私にエンリョ、しなくてもいいんだよ……嫌いなら、嫌いって

言ってよ……そのほうが私も諦めがつくし……」

やばい。小夜は勘違いをし始めている。

「俺は……小夜が……」

「私が……？」

「……俺も好きだった」

言った。言えた。遼への罪悪感が消えたわけではないが、小夜を傷

つけたくなかった。

「ほんとに……？」

「うん」

「やったあ！」

小夜は今までにないほどの顔で笑った。

こんなに嬉しそうな顔を見たのは始めてだ。

こんな顔に自分がさせたのだと思うと、なんだかこっちまで嬉しくなってくる。

「じゃあ、これからも改めてよろしくね！」

「おう」

小夜を諦めてくれた遼や、こんな俺に好意を寄せてくれた由宇には本当に悪いと思う。

でも、俺は小夜がいてくれれば、どんなときだって笑っていけると思うんだ。

ごめんな、遼、由宇。

そして、これからよろしくな、小夜。

番外編・君の存在（前書き）

サブタイトルにも書いたとおり、Your mineの番外編です。  
遠視点ですね。

## 番外編・君の存在

何だろう。この気持ちは。

今までに感じたことのない切なくて、痛くて……。

「遼……?」

声のした方を見ると、由宇が心配そうな顔で佇んでいた。

「ん?なにが?」

俺は無理に明るい声を出して笑った。

「大丈夫……?」

由宇がおそろおそろといった感じで、歩み寄ってきた。

「だから、なにが?」

「遼、泣いてるから……」

「……」

俺はそこで初めて自分が涙していることに気付いた。

「あれ?嘘……全然、気付かなかった……ゴミでも入ったんかな」

「小夜に……ふられたの?」

こういうとき女って鋭いよな。

「あ、分かる?俺、ダサすぎだよなあ。先に告白したのにあいつに持ってかれるなんてさ」

「……無理、しなくていいよ」

「何言ってるんだよ。無理なんてしてねえよ。ま、俺は恋多き男だから?小夜ぐらいにフラれたからってなんの問題も……」

俺は次の瞬間、由宇に抱きしめられていた。

「無理しないで……泣いていいよ」

由宇の声は震えている。

ああ、そうか。こいつも耀が好きだったんだよな。

俺が失恋、つまり由宇も失恋ってことだ。

辛いのは、俺だけじゃない。

そう思うと、無理に作っていた笑顔がとれ、情けなく歪んだ顔になった。

両目からは再び涙が溢れ出す。

大好きだった。

人をこんなにも好きになったのは初めてだった。

ひとつひとつの行動が可愛くて、愛しくて……。

俺も由宇の背に手を回し、抱きしめあいながら、泣いた。

まるでお互いがいなければ、どうにかなくなってしまつてしまつていっふうに強く、強く抱き合った。

「あ、遼、由宇……」

「よ、よお」

小夜と遼がきままずそうに声をかけてくる。

なに遠慮してんだよ。バーカ。

俺はもうこうして一緒にいてくれるこいつがいれば、大丈夫だよ。

この手さえあれば……。

「よお」

「おはよう、耀、小夜」

俺たち二人はしっかりと手を握ったまま、耀と小夜のもとに歩いていった。

## 番外編・君の存在（後書き）

本当に久しぶりの投稿です。

まだまだ未熟者ですが、応援してやってください。

評価をお待ちします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5260a/>

---

Your mine

2010年10月9日01時57分発行